

少海沖の者る者  
十月

琉球参府之記

實文十卷年七月

一 近日琉球人南地糸急中山名通筋し所ハ  
乃を化り急浦赤八砂と入法より一戸の心を  
多めとる去たしる化り中なる後出を乃也り  
比男磯所より合あるより一戸の化り一戸の化り  
至るを法一と化一

七月

一 明日琉球人南地糸急中山名通筋し所中  
不化法、急し核急夜二戸の化り一戸の化り  
店より一戸の化り一戸の化り一戸の化り

言わしは信り奉事

一 乃亦桶画の事、前なる道之沖に  
琉球人<sup>舟</sup>出あり、水打中事

一 琉球人舟出別名、下船、月外均欠り不  
他法、言し桶、一戸舟中、水戸候、舟中事

一 琉球人<sup>舟</sup>出、城、日又上船、後言、系、福、日  
次、家元、後、是、言、右、為、同、事

一 琉球人系、舟、出、日、又、上、船、後、言、系、福、日  
尚、番、方、出、言、度、之、沖、以、火、し、中、一、戸、舟、中、事

附所中水漏桶小の、入、桶、画、事、存、り  
前より、一、重、為、火、事、出、来、り、兼、舟、中、  
舟、出、り、迄、集、り、消、し、中、事

七月

天和二戊年 四月

一 道日琉球人、舟、出、北、系、之、仕、傳、所、中、言、他、法  
言、し、桶、画、度、一、戸、舟、中、是、初、仕、傳、者、底、才、舟、中  
不、之、舟、出、琉、球、人、舟、出、刻、由、ハ、舟、一、言、り、ハ、  
仕、傳、者、也

一 琉球人系、舟、出、中、舟、通、船、所、ハ、舟、一、言、り

忽ち及ぶハ砂と入て下りしと云杯を信する者ハ  
勿論其處ニ為中合並より早に信て下りし者ハ  
まゝに在る者及ハ琉球人ハ忽ち日之水打ハ桶  
面ニ取しおよよなり（直掃除等ハ琉球人  
所ハお希ハあり下り云）

一 琉球人及ハ刻名主致下知月終事欠也下  
云依法ニ言ハ振一戸付ハ及水戸縣ニ家也本戸  
付在在噴噴ハ通言ハ振一戸付事

附琉球人及ハ城日又ハ上野場与ハ各諸島次  
安評後是ハ元古同ハ多ハ可事

四月

一 今日琉球人及中島乃波是也者ハ初子  
相觸ハ也流流然然是也之信を琉球人ハ  
以是者ハ乃波ハ計者所中ハ不沙早ハ相觸  
中島乃波沖ハ有者浦ハ也

比月

宝永七寅年十一月

是

一 琉球人及ハ有月也ハ信者ハ初子ハ

所中小之園一せいのほほをい海に之れぬり  
立座をいしあの中板に仕付け町中可  
相觸の望

十月

一 琉球人西島地系急初等一筋天起平福は公

是

才九十八日琉球人松平清隆等其下屋敷より  
将監橋河川前増守と長門河川道町芝口  
河川より河原端常橋河川より河原上  
屋敷より河原掃除入心則於河川に橋を

出座の中は先を二相觸の在り町中は其の昔  
之屋敷よりせしむる愛のを見たり昔の河  
川に橋を仕付け町中二相觸の望

十月

一 明治二日琉球人上座

町官の系清波の川及び河松平清隆等其下  
屋敷に在りて城の毎日比谷河川通りをい  
かへりて大子前より一橋河川に河原橋流意の  
通りより神田橋より河川用屋敷より河原橋  
本由信徳寺前河川上座に在りて河原橋六

右ノ各節ヲ就テ夫ヨリ在所節場ニ書表ハシテ  
同所ノ所トシテ之ヲ以テ所ノ所ニ書表ハシテ  
先達言相觸ハシテ掃除ト念ニシテ所中可  
相觸ハシテ

十月

〇元

明日日天守結立シテ院跡ノ所ニ家方  
兼ハ乃節松平薩摩守等ノ書表ヨリ新橋  
ニ被テ之ノ所秋田信濃等中ノ書表上野民被備  
中ノ書表亦ヨリ市ノ所南館等ノ書表亦

松平人相書書表殿道地場とありての故松平谷  
田ノ外ハ地場とあり市谷田所ハ幡カヨリ地場  
ノ書表相触トあり市谷田地場ノ通リ半ノ所  
ハ地場ノ外ハ地場なり水戸殿ノ書表相触トあり  
市谷田内ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場  
紀伊國殿ノ書表相触トあり松平人相書書表  
表ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場  
松平大和守表ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場  
八幡カヨリ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場  
殿ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場ノ外ハ地場

坊以割不中且把人不仿法言之板所中一  
相觸也

十二月

一明十日胡之海行琉球人由西出是身  
町中不化法言之板所中一之板合言可  
中何年某府之板相觸也且把言海亦  
込合中言有之各言波下知月事是也  
安未之板之板之木戸有在是也之不合  
板より一有言流口海言之板一有言山外

系府之板相觸也相觸板所中一有言  
一相觸也

十二月

正徳四年二月

一當秋松平廣濟寺琉球人自是系府有波  
薩列大坂近波海之内若風波氣吹也板  
海之板也板合板之板中言山外言  
薩列近寺右同寺之板也  
一右琉球人波海言言波海之波氣吹也  
琉球人系山外言言入交波系又不限波

中江氏の子孫に傳ふべき事は、  
古に傳ふべき事は、因に琉球人、  
泊と傳ふべき事は、高に琉球人、  
言に相傳ふべき事は、相傳ふべき事、  
言に相傳ふべき事、

右に後大坂町、

六月

- 一 琉球人、
- 琉球人、
- 琉球人、

二 中江氏

十月

- 一 琉球人、
- 一 琉球人、
- 一 琉球人、

- 一 明九日早天、
- 琉球人、
- 琉球人、
- 琉球人、
- 琉球人、
- 琉球人、



為後考屋道亦非伊傳中も屋敷亦不蔵  
此門入竹橋此の東平川此の西戸山城也  
屋敷亦不蔵松平右京復屋敷亦不蔵橋  
出陣用屋敷亦不蔵平橋此の東明神此の西  
此同前日横町を巡りし物屋敷亦不蔵也  
前天神切此の東平川復此の西平川入

同帰乃

仁皇門より廣小治の東平川右と將監屋敷  
本多氏此の東屋敷亦不蔵造橋此の東平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川

其屋敷此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川

三月

一 明吉早天、此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川  
此の東平川復此の西平川此の東平川復此の西平川

帰道節

上松氏部大捕屋為前松平氏部大捕屋の前者  
 ありし一橋のてし岩の下の増上松門  
 赤色を町に増上松門の月同所之に松  
 芝屋敷の増上松門の増上松門  
 桶水と入る一橋のてし岩の下の増上松門  
 町中淺草し者之てし岩の下の増上松門  
 之の不能法之松之住のてし岩の下の増上松門  
 十二月  
 十二月十日のてし岩の下の増上松門  
 七宮系十二月十日のてし岩の下の増上松門

一 明太日琉球人由因地是の町中不能法  
 之の松之てし岩の下の増上松門  
 不適合松之てし岩の下の増上松門  
 松之松之てし岩の下の増上松門  
 松之松之てし岩の下の増上松門  
 松之松之てし岩の下の増上松門  
 十二月

享保二戊申閏十月  
 中渡



一琉球人毎百刻名之下知事一  
早之化法者格小一戸付の友本戸殿の家主  
本戸の付は進言は神言は格一戸付の附  
琉球金城の目次之友計は格一戸付の  
同其事

十月

一琉球人余の身月我の族は者凡太統一之し  
町中三三とありせぬは格一戸付の障一之族は者  
立之れは一戸付の格一戸付の相酌は一

十月

高家 礼  
馬間語同端子  
本家者番同端子  
兼之同語同端子  
兼之同語同端子  
兼之同語同端子  
明十二日琉球中心之使是河野中上は乃由是  
相衣大紋布衣之し此同也 城は格一戸付の

意匠之画々不及也 城山

十月

一明十言琉球會城設一舟松平薩摩守之  
屋敷より將監持片岡宗塔上り表の舟通町之口  
河川前より城端表橋迄より薩摩守上屋敷迄  
乃能掃除入意同敷敷一ノ桶と少一重可  
中山之舟より相觸の色町中継者三々之  
中る表の舟見物し者不地法守極一信は者町中  
の相觸の色

十月

